

転生したらワンピース の世界だった件(仮)

ふっか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実世界で事故に逢い、死んでしまったカイト。

彼が目を覚ました場所はなんと、ワンピースの世界だった！

目次

東の海編

第1話	出航そして侵略	1
第2話	アーロンとの戦いそして出航	5
第3話	v s. バギー海賊団	10
4話	VSクロネコ海賊団	18
5話	クリーク海賊団襲来&ゾロv s. 鷹の目そして、出港	24
5. 5話	ココヤシ村	36
6話	ローグタウン	40
7話	偉大なる航路編 リヴァース・マウンテン	

東の海編

第1話

出航そして侵略

あつれれ〜おつかしいぞお〜

俺事故にあつて死んだよな？

なんで赤ちゃんになつてるんだ？しかも前世の記憶あるし。

もしかして異世界転生か？

〜111年後〜

この111年で分かつた事がある。

まず名前

カイト

まさかの前世と同じ名前かよ。

そしてここは前世で俺が大好きだったワンピースの世界のフーシャ村だということ。

そして、つい最近シャンクスがこの村を拠点にし始めたところだということ。

とりあえずこれから何しよ。

せっかくワンピースの世界に来たんだからやっぱ海賊になりたいなあ。

海賊になるには強くなきゃだから、とりあえずシャンクス頼んで修行つけてもらおう。

ということ、1年後位にこの島を出るということだったのでそれまでシャンクスに修行をつけてもらえることになった。

修行の途中で、ルフィと知り合った。

そして、なぜかシャンクス達が悪魔の実を2つ持ってた。

ひとつはゴムゴムの実でもう1つは知らない悪魔の実だった。

そして、ルフィはゴムゴムの実を、俺はもう1つの方を食った。

俺が食った方はミズミズの実と言うらしい。

修行が始まってから1年後、シャンクスが出航した。

修行の成果は、武装色と見聞色を使えるようになった。まあ海軍の中将クラス程度。覇王色は使えるようにならなかった。

そして、その後エース、サボ、ルフィと盃をかわして義兄弟になった。

〈数日後〉

フーシャ村の港にはエース、サボ、ルフィとマキノや村長や村の住人が集まっていた。

「エース、サボ、ルフィ！俺は先に海へ出る。じゃあな！」

「「ああ！」」

「マキノさんや村長、村のみんなもじゃあな！」

俺は皆に別れを告げると船を走らせた。

とりあえずココヤシ村に向かってナミさん達を助けよう。

そして、俺はココヤシ村に向かった。

数ヶ月後

ふう、何とかココヤシ村に着いた。とりあえず上陸しよう。

「旅のお方ですか？」

声をした方を振り返ってみると、そこにはココヤシ村の駐在のゲンさんがいた。

「ええ、そうです」

俺はそう答えた。

「そうですか。まあゆっくりしてってください。良かったら村を案内しましょうか？」

ゲンさんはそう言ってきた。

「じゃあよろしくお願いします」

と言う訳で村を案内して貰った。

それとしばらく滞在させて貰えることになった。

その数日後、アーロンがやってきた。

「海賊だアっ！」

「アーロン一味だ…!!!」

「アーロン!!？」

「そんなバカな!!」

村人達はすごく驚いていた。

「シャーッハッハッハッハッハッハッハッハッハ!!!ゴキゲン麗しゆうくだらねエ人間どもよ!!!今この瞬間からこの村、いやこの島を俺たちの支配下とする!!!」

第2話　　アールンとの戦いそして出航

「シャーツハツハツハツハツハ!!ゴキゲン麗しゆうくだらねエ人間どもよ!!!今この瞬間からこの村、いやこの島を俺たちの支配下とする!!!」

そして、アールンは大人1人10万ベリー、子供1人5万ベリーと言って村人から金を巻き上げて行つた。

そして、アールンの仲間がベルメールさんの家を見つけてしまった。

アールン達はベルメールさんの家に向かった。

「ベルメールさん!!」

茂みに隠れていたナミとノジコが声を出した。

その後2人はベルメールさんの家に向かって走り出した。

俺は2人を追いかけた。

ベルメールさんは、アールンに腕を踏みつけれていた。

俺は、アールンに向かって行ってアールンを殴つた。

「下等な人間のガキが俺様に何をした!」

「うるせえよ。クソ半魚野郎!」

「半魚だと？下等な人間如きがア！^{シャーク}鯨・ON・DARTS^{ダーツ}」

アーロンは、口を開けて回転しながら突撃してきた。

俺は、それを避けようとしなかった。

「危ない！避ける！」

ゲンさんがそう叫ぶが、俺はそれを無視し、ぼーっと突っ立っていた

「シャーハツハツハツハツハ！バカめ！そのまま風穴あけて死ぬッ！」

アーロンが俺の体を貫いた瞬間、俺の体はアーロンがぶつかった場所を中心に、液体化して水になった。

そして、アーロンは地面に突き刺さった。

「貴様ツ！悪魔の実の能力者か！」

アーロンが立ち上がってそう言ってきた。

「そうだ。俺はミズミズの実を食った水人間、体を自由に水に変化させることが出来る
り水を操る事が出来る」

「チツ！自然系か、^{ロギア}てめえらすらかるぞ。」

アーロンはそう言って逃げようとした。

「逃がすか！」

俺はそう言うのと体を水化させて移動し、アーロンにしがみついた。

「離セツ！な、なぜ干からびているんだ？貴様何をしたア！」

「俺は水分を操れるから相手の水分を吸い取って干からびさせることも出来るんだよ！」

そして、アーロンは気絶した。

「さて、お前らの船長はダウンしたがまだ続けるか？まあ逃げようとしても逃がさないけどな」

「舐めるなア！」

そう言っつてエイの魚人のクロオビが向かってきた。

「武装色！硬化！」

俺はそう言っつて武装色の覇気を発動した。

「おりやア！」

俺は、武装色の覇気を纏った腕でクロオビを殴った。

「ぐはア！」

そしてクロオビが気絶した。

数分後、俺アーロン一味を全員制圧した。

そして、初めての戦闘のため、疲れて倒れた。

（3日後）

「はっ！ここは？魚人たちは？」

目を覚まして飛び起きると、どこかの部屋のベッドに寝かされていることに気づいた。

「魚人達は君が全部倒したぞ。そしてここは君が使ってた部屋だ」

俺は声がした方へ目を向けた。

そこにはゲンさんがいた。

「魚人達から村を守ってくれてありがとう。君には感謝してもしきれない。お礼と言っ
てはなんだが、君が満足するまでこの村に滞在するといい」

ゲンさんがそう言ってきた。

「いや。当たり前のことをしたまです。じゃあお言葉に甘えて10年位滞在させてく
ださい」

「わかった」

というわけでココヤシ村に10年間滞在させてもらうことになった。

〜10年後〜

ココヤシ村に滞在させてもらってから10年が経った。

この10年間で色々修行した。

俺は、フーシャ村に向かって船を出すところだった。

ちなみにナミは俺についてくることにしたようだ。

「ココヤシ村の皆さん、10年間お世話になりました」

「ココヤシ村のみんな！今までありがとう！元気でねー！」

俺とナミは、村の人達に別れを告げて小船を出した。

「本当によかったのか？俺と一緒にきて」

「うん！私の夢は自分の目で見た世界地図を書く事だもん。それに、カイトと一緒にいたいから」

やばい可愛い。

待ってるルフィ。俺がお前の仲間になってやる。

第3話 v s . バギー海賊団

俺とナミは、偉大なる航路グランドドラインの海図をバギー海賊団から盗むためにオレンジの町へ来ていた。

そして今、俺は、バギー海賊団の下っ端と戦っていた。

しばらくして、下っ端たちを全滅させたとき上空で、爆発音が聞こえた。

そして、何かが降ってきた。

「くっそく。何で砲弾が飛んでくるんだ!? あーでも助かった。あつ! お前もしかしてカイトか!」

落ちてきたやつ。否、ルフィはそう言って立ち上がった。

「ああ。久しぶりだなルフィ、相変わらずだな」

俺は、ルフィにそう言った。

「カイト、その人は?」

ナミは、そう言いながら隠れていた所から出てきた。

「こいつは、ルフィ。前にココヤシ村にいたときに少し話した俺の弟だ」

俺は、そう言ってナミにルフィを紹介した。

「ルフイ、彼女はナミ。俺の仲間だ」

そして、ルフイにナミを紹介した。

「そうか、よろしくな。ところで、おまえら俺の仲間にならないか？」

ルフイはそう言ってきた。

「俺は、いいぞ。ナミはどうする？」

「カイトが入るなら私も入る」

「ということだ。よろしくなルフイ」

「おう」

というわけで俺たちはルフイの仲間になった。

「とりあえずバギーを倒しに行くか」

「バギーって誰だ？」

ルフイがそう聞いてきた。

「バギーはね、大砲好きで有名な海賊なの。どこだかの町で子供に自分の鼻をバカにされたからって大砲でその町一つを消し飛ばしたって話もあるし、その上妙な奇術を使うとも聞いているわ」

ナミがルフイにそう説明した。

「よっしゃ行こう。どこに居るんだバギーは」

「こっちだ」

俺は、そう言ってバギー海賊団のいる酒場に向かって歩き出した。
しばらくすると、酒場についた。

「よし、着いた」

俺はそういうと、腕を水に変化させ手首を勢い良く発射させ、酒場の屋上の柵をつかんだ。

そして、勢い良く上へと飛び上がった。

「ウォーターガトリング
水銃乱打!!」

俺は、バギー海賊団の奴らに向かって両手を前に出し、銃のように構えてそう叫んだ。
すると、バギー海賊団の下っ端たちは俺の指先から放たれた水の銃弾にあたり、次々と倒れていった。

そして、俺は酒場の屋上に着地した。

「何者だ、てめエは!!」

バギーは俺に向かってそう言ってきた。

「俺は、カイト。お前たちから海図を盗んだ奴の仲間だ」

俺は、バギー達にそう名乗った。

「そうか、あの女の仲間か。なら、ハデに死ねエ!!バラバラ砲^ほーうっ!!!」

バギーがそう叫ぶと、ナイフを指の間に三本挟んだ腕を発射してきた。簡単に能力を明かすと面白くないしよけるか。

俺は、右に転がり、何とかしてよけた。

「よつと。おいカイト、おいてくなよ。おい、でかつ鼻！お前がバギーか？」

「誰がでかつ鼻だア!!!先ずはてめエからハデに死ねエ!!!」

「ルフイ、後ろの二人は俺がやる。バギーは任せた」

「ちよつと待った、俺も混ぜてもらおうか」

そういいながら、ロロナア・ゾロが現れた。

「わかった。じゃあ、俺は、ライオンの方をやる。あんたは、もう一人の方を頼む」

俺は、そういうと、モージと対峙した。

ルフイ達はというと、下に降りて戦っている。

「おれはバギー一味猛獣使いのモージだ」

モージはそう名乗った。

「そうか、雑魚に興味はない」

「てんめエさっきの奇襲が成功したからつて調子乗ってんじゃねエのか？まず、おれの怖さを知らんらしい…やれ!!!リッチー!!!」

モージがそういうと、リッチーが襲い掛かってきた。

俺は、ギリギリで上に飛んでよけた。

そして、モージに蹴りを入れた。

すると、モージは吹っ飛んだ。

(やべ、やりすぎたか? まあいいか)

というわけで俺は、ルフィたちのところへ向かうことにした。

ルフィたちのところに着くと、ちょうど町の人が集まって来たところだった。

「君達……俺達はこの町の住人だ。海賊達の仲間割れでも起きたのか……何か知っていれば教えてくれ……!」

オールバック風の髪形の町民がそう聞いてきた。

「なんだ……町の人達か、まだ仲間がいたのかと思った」

ナミがそう言って安堵した。

「あ!! 町長つ!! なんてことだ!! しっかりしてください!! くそつ!! 一体ここで何があったんだ!!」

「海賊達の仕業に違いはない!!」

町の人たちは町長の周りに集まりながらそう言っていた。

「あごめん。そのおっさんは俺がぶつ倒した!」

ルフィは町民達にそう言った。

「何!？」

ルフィの言葉を聞いて町民達がこちらをにらんできた。

「ちよつと! そんなことわざわぎ言わなくても」

「見てたろ」

「見てたけど!! それにはちゃんと理由が…」

ルフィとナミが言い合いをしていた。

「お前らうちの町長をこんな目に合わせといて」

「言い訳は聞かんぞ!!」

「何者だ!! まさか海賊か!？」

町の人たちが口々にそう言ってきた。

「海賊だ!!」

ルフィが町の人たちにそう答えた。

「やっぱりそうか!!」

そういうと、町の人たちは襲い掛かってきた。

「ばっかっ!!」

ナミはルフィそう言っけてキレイていた

「ほんとだろ!!」

ルフィはナミにそう言い返していた。

「逃げろっ」

ルフィはゾロを担いでそう言って走り出した。

「もうっ!!」

ナミは、そう言ってあきれながら走り出した。

俺も二人の後に続いて走り出した。

しばらくすると、港に着いた。

「はあー怖かった。シユシユのおかげで何とか逃げ切れたわ。何で私達がこんな目に合わなきやなんないの?」

ナミがそう言った。

「いいだろ別に、おれ達の用は済んだんだから!」

ルフィがナミにそう言った。

「とりあえず出港準備しようぜ」

俺はそう言って船に乗ると、帆を張った。

「おい待て小童共!!」

町長のおっさんが船着場のところからそう叫んできた。

「町長のおっさん!」

ルフィは町長のおっさんに気づいてそう言った。

「すまん!!! 恩にきる!!!」

町長のおっさんは俺たちにそう叫んだ。

「気にすんな!! 楽に行こう!!」

ルフィは町長のおっさんにそう返した。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺はカイト。ルフィの兄だ。よろしくな。」

俺はゾロに向かって手を差し出しながらそう言った。

「ルフィの兄貴なのか。俺はロロノア・ゾロだ。よろしくな」

ゾロはそう言って俺の手を握り返した。

4話 VSクロネコ海賊団

オレンジの町を出てから二日が経った。

俺達は、食料や船と仲間を手に入れるためにシロップ村に来ていた。

そこで、キャプテンクロの計画を知り、俺たち四人は、村を守るためにウソップに協力することにした。

翌日、早朝、俺は、ルフィたちがいる海岸とは逆の北の海岸に停泊しているクロネコ海賊団の船に忍び込んでいた。

(外のクロネコ海賊団の奴らはもうすぐ来るウソップ達に任せてこの船の宝を頂いておくか)

俺は心の中でそう思い、クロネコ海賊団の船の探索を開始した。

(なんだよ、少ねえな。まあいいか、とりあえずこれをおれたちの船へ運ぼう)

探索を開始して数分後、宝の入った袋を一袋抱えて船から出ようとしていた。

ドスーン!!

「おいおいブチ!! 来て見ろよえれエこった船首が折れてる!!!」

「なに、船首がア!!?おいおい、どういう理由で折れるんだ!!」
船の先頭の方からそんな声が聞こえてきた。

「下りて来い!!!」ニヤーバン・兄弟ブラザーズ」

船の外のほうからそんな声が聞こえた。

(やべえな、とりあえず俺も戦いに参加するか)

そして俺は、船室から甲板に出た。

甲板に出ると両手を前に出し、指を銃のように構えた。

「水銃乱打!!」
ウォーターガトリンク

そう叫ぶと地面に座り込んでいる敵に向かって指先から水の銃弾を乱射した。

「水拳!!」

俺は、右腕を水化させ水の拳を放ち、ジャンゴを殴り飛ばした。

「ナミ、大丈夫か」

俺は、ゾロの刀を拾ったナミにそう言った。

「カイト!どこに行つてたのよ」

ナミがそう言ってきた。

「わりいな。あの船からお宝をいただきに行つてた。まあこんだけしかなかったが」

俺は、そう言つて左手で持つていた宝の入った袋をナミに渡し、ゾロの刀を受け取つてゾロに渡しに行つた。

「もう、とうに夜は明けきつてるのになかなか計画が進まねエと思つたら…何だ、このザマはア!!!」

声のする方を見てみると、崖の上に男が立つていた。

その後、キャプテン・クロがニヤールバン兄弟に五分でこの場をかたづけろと命令して、ゾロとニヤールバン兄弟の戦いが再開した。

そして、寝ていたルフィが復活し、クロを殴つた。

「ジャンゴ!!!その小僧はおれが殺る。お前にはその小僧とカヤお嬢様を任せる。計画通り遺書を書かせて…殺せ。それに、アリの三匹。目障りだ」

キャプテン・クロはジャンゴにそう言つた。

「引き受けた」

ジャンゴはそう言うと、俺に向かってチャクラムを投げてきた。

俺は、そのままよけずにジャンゴのほうに向かつていった。

ズバツ!!

ジャンゴが投げたチャクラムは俺の体をすり抜けずに脇腹をかすめた。

「なツ!!クソツ、油断した。海楼石かよ!」

そう言つて俺は、倒れた。

「もしもの時の為に、海楼石を含んだチャクラムも持つていてよかつた。この小僧はしばらくうごけないだろうし、小娘を始末しに行くか」

（どうゆうことだ？なんでジャンゴが海楼石が入った武器持つてんだ？原作だと海楼石出てくるのもう少し後だったような…俺が転生した影響で原作改変が起こつてるのか？まあいいか。とりあえず後はルフィたちに任せるか）

数十分後、俺達はクロネコ海賊団を倒し、お嬢様の執事のメリーが船をくれるということとで海岸に来ていた。

「うわああああああ。止めてくれ——っ!!」

俺とナミがメリーさんからゴーイング・メリー号の説明を聞いていると、坂の上から大きなリュックを背負つたウソツプが転がり落ちてきた。

「何やつてんだあいつ」

「とりあえず止めとくか、このコースは船へ直撃だ」

「そうだな」

ルフィとゾロと俺は、そう言つて足でウソツプを止めた。

「……………!!わ……………わりいな…」

「「おう」」

「やっぱり海へ出るんですね、ウソツプさん」

「ああ、決心が揺れねエうちにとつとと行くことにする。止めるなよ」

「止めません…そんな気がしてたから」

「なんかそれもさみしいな」

「今度この村に来るときはよ、ウソよりずっとウソみてエな冒険譚を聞かせてやるよ!!」

「うん、楽しみにします」

「お前らも元気だな。またどつかで会おう」

「なんで？」

「あ?なんでってお前愛想のねエ野郎だな…これから同じ海賊やるってんだからそのうち海で会ったり…」

「何言ってるんだよ、早く乗れよ」

ゾロがウソツプにそう言った。

「え?」

「おれ達もう仲間だろ」

「キャ…!!キャプテンはおれだろうな!!」

「ばかいえ!!おれが船長だ!!」

というわけでウソツプが仲間になった。

そして、俺達はシロツプ村を出港した。

5話 クリーク海賊団襲来&ゾロvs. 鷹の目そして、 出港

シロップ村を出港した俺達は、メインマストと三角帆の柱の上にウソップが描いた海賊旗を結び終わり、休んでいた。

ドウン！

音がした方を見るとルフィが大砲の練習をしていた。

その後、ウソップが遠くの岩山を大砲で撃ち抜いた。

そして、今はラウンジで次にどのポジションの仲間を探すかについて話をしていた。
バキバキツ！

「出てこい海賊どもオーっ!!! てめエら全員ぶっ殺してやる!!!」

外からそんな声が聞こえてきた。

「おい!! 誰だお前!!!」

ルフィがラウンジから出てそう言った。

「誰だもクソもあるかア!!!」

そう言うと、ルフィに斬りかかった。

数分後色々あつて和解した。

そして俺達はヨサクとジョニーの案内で海上レストランバラティエに向かうことになった。

バラティエについたら、なんやかんやあつてルフィが一年間雑用をすることになった。

そして、バラティエに来て二日が経ち事件が起きた。

ゼフが渡した百食分の食料と水によつて元氣を取り戻したクリーク海賊団の奴らが攻めてきた。

ズババン!!

「何が起きたア!!!」

ドン・クリークが外の巨大ガレオン船に向かって叫んだ。

「^ド首領・クリーク!!!本船は……!!!斬られました!!!」

「斬られた? 斬られただど!!!この巨大ガレオン船をか!!!? そんな………!!!バカな話があるかア!!!」

クリークがそう叫んだ。

「やべえ！船にはナミ達が!!」

俺はそう言つて体を水酸化させてメリー号のほうへ向かった。

「ナミ！大丈夫か!!」

俺はバラティエから飛び出し、メリー号にいるナミに向かつてそう言った。

「私は、大丈夫！ヨサクとジョニーも無事！」

ナミがそう言った。

「よかった。ナミ達はメリーにいてくれ、あいつらは俺たちが何とかする!!」

俺は、ナミ達にそう言った。

「あいつだア!!!^{ドン}首領クリーク!!!あの男です!!!我々の艦隊を潰した男!!!ここまで追つてきやがったんだ!!!俺たちを殺しにきやがった!!!」

クリークの部下の一人がそう叫んだ。

「あの野郎……」

クリークが目を見開いてそう言った。

「まさか……あれが……鷹の目の男……!?!」

ゾロがそう言った。

「あいつが……一人で50隻の船を沈めたってのか……!?!」

「……じゃあたつた今クリークの船を破壊したのも!?!」

「普通の人間と変わらねエぞ…特別な武器を持つてるわけでもなさそうだ…」

コック達が口々にそう言った。

「武器なら背中にしよつてるじゃねエか！」

ゼフがそう言った。

「そんな…まさか…：…じゃあ、あの剣一本で大帆船をぶった斬ったとでも!？」

コックがそう言つて驚いていた。

「そうさ…：…鷹の目の男」とは大剣豪の名。奴は世界中の剣士の頂点に立つ男だ」

ゼフがそう言った。

「終わりだ…畜生オ、てめエ!!何の恨みがあつておれ達を狙うんだ!!!」

クリークの部下がビビりながらそう言った。

「ヒマつぶし」

鷹の目がそう言った。

「フザけんなア——つ!!!」

クリークの部下がそう叫んで鷹の目に向かって銃を撃った。

「え…：…?!?!は…ハズれたぞ!!!」

銃を撃つたのとは別のクリークの部下がそう言った。

「外したのさ。何発撃ち込んでも同じだ。切っ先でそつと弾道をかえたんだ」

ゾロがクリークの部下の後ろからそう言った。

「……………!?てめエは誰だ!!」

クリークの部下の一人がゾロにそう言った。

「あんな優しい剣は見たことがねエ」

ゾロがそう言った。

「柔なき剣に強さなどない」

鷹の目は刀を背中の鞘に納めながらそう言った。

「その剣でこの船も割ったのかい」

ゾロが鷹の目にそう言った。

「いかにも」

「なる程…最強だ。おれはお前に会うために海へでた!!」

ゾロが鷹の目に向かってそう言った。

「……………何を指す」

鷹の目がゾロにそう問うた。

「最強」

ゾロがそう言って頭にバンダナを巻いて笑った。

「ヒマなんだろ? 勝負しようぜ」

ゾロが鷹の目にそう言った。

「か…刀三本…!?おい…コイツまさか……………!!コイツ…ゾロだ!!三刀流の…ロロノア・ゾロだ!!!」

クリークの部下の一人がそう叫んだ。

「なにい——っ!!」

クリークの部下達がそう言って驚いた。

「……………海賊狩りか…………」

クリークがそう言った。

「……………あいつが……………!?!」

サンジがそう言って驚いた。

「哀れなり、弱き者よ。いっばしの剣士であれば剣を交えるまでもなくおれとぬしの力の差を見抜けよう。このおれに刃をつき立てる勇氣はおのれの心力か…はたまた無知なるゆえか」

鷹の目が向かい合ったゾロにそう言った。

「おれの野望ゆえ。そして、親友との約束の為だ」

ゾロはそう言って刀を二本握り、一本口にくわえた。

「こんなに早く会えるとは、正直考えてなかったぜ…」

ゾロが鷹の目にそう言った。

「無益」

鷹の目がそう言った。

「世界最強の剣士と…海賊狩りのゾロ…!! 一体どんな戦いになるんだ…」

バラティエのコックの一人、パティがそう言った。

「アニキに敵^{かな}う奴なんているわけねエ!!」

ヨサクがそう言った。

「オイ何のつもりだそりゃあ」

ゾロは、背中の刀ではなく短剣を抜いた鷹の目に向かってそう言った。

「おれはうさぎを狩るのに全力を出すバカなケモノとは違う。多少名を上げた剣士がいたところで、ここは『赤^{レッド}土^{トライン}の大陸』と『偉^{グランド}大^{トライン}なる航路』により四つに区分される海の中でも最弱の海『イースト・ブルー』。あいにくこれ以下の刃物は持ちあわせていないのだ」

鷹の目はゾロにそう言った。

「人をバカにするのもたいがいにしろ…!! 死んで後悔すんじゃねエぞ!!」

ゾロがそう言って鷹の目に向かっていった。

「井の中の蛙えし蛙よ、世の広さを知るがいい」

鷹の目はそう言つてナイフを前に突き出した。

「鬼!!!斬り!!!」

ゾロはそう言つて三本の刀の刃をクロスさせて鷹の目に向かつていった。

しかし、ゾロの技はナイフ一本で止められてしまった。

「アニキの『鬼斬り』が止まった!!!出せば100%敵が吹き飛ぶ大技なのに!!!」

ヨサクとジョニーがそう言つて驚いた。

「何を背負う。強さの果てに何を望む、弱き者よ……」

鷹の目がゾロにそう言つた。

「アニキが弱エだよこのバツテン野郎オ!!!」

「てめエ思い知らせてやるその人は……」

ヨサクとジョニーがそう言つて飛び出そうとした。

「やめろ手エ出すなヨサク!!ジョニー!!!ちゃんとガマンしろ!!!」

ルフィがそう言つてヨサクとジョニーを止めた。

「虎……狩り!!!」

ゾロはそう言つて鷹の目に攻撃を仕掛けた。

ズバン!!

鷹の目に攻撃を仕掛けたゾロはナイフで胸を刺された。

「このまま心臓を貫かれないか。なぜ退かん」

鷹の目がゾロにそう言った。

「ギアね…わからねエ…ここを一步でも退いちまったら、何か大事な今までの誓いとか約束とか…いろんなモンがヘシ折れてもう二度と帰ってこれねエような気がする」

「そう。それが敗北だ」

「へへっ…じゃ、なおさら退けねエな」

「死んでもか……………」

「死んだ方がマシだ」

ゾロがそう言うと、鷹の目はナイフを抜いた。

「小僧…名乗ってみよ」

「ロロノア・ゾロ」

「憶えておく。久しく見ぬ『強き者』よ。そして、剣士たる礼儀を持って世界最強のこの黒刀で沈めてやる」

そう言って鷹の目は黒刀を抜いた。

「散れ!!!」

「三刀流奥義!!!三・千・世・界!!!」

そして、ゾロの刀と鷹の目の黒刀がぶつかりあい、ゾロの刀が二本斬られた。

ゾロは残った刀を納刀すると、鷹の目の方を向いて両腕を横に伸ばした。

「何を…」

「背中への傷は剣士の恥だ」

「見事」

ズバン!!

ゾロは鷹の目に斬られ海に落ちていった。

「ゾロォ——っ!!!」

ルフィがそう叫んで鷹の目に突っ込んでいった。

そして、ヨサクとジョニーはゾロを助けるために海に飛び込んだ。

「我が名ジュラキュール・ミホーク!! 貴様が死ぬにはまだ早い。己を知り、世界を知り!! 強くなれロロノア!! おれは、先幾年月でもこの最強の座にて貴様を待つ!! 猛ける己が心力挿してこの剣を超えてみよ!!! この俺を超えてみよロロノア!!!」

ミホークがゾロにそう言うと、それに反応したのか船に寝たまま、刀の先を天に向け
た。

「…ル…ルフィ…?…聞…コえ…るか? 不安にさせたかよ…俺が世界一の剣豪にくらい

ならねエと…お前が困るんだよな………!!!おれはもう!!二度と負けねエから!!!あいつに勝って大剣豪になる日まで、絶対にもうおれは負けねエ!!!文句あるか海賊王!!!」

ゾロはそう宣言した。

「しししし!!ない!!!」

ルフィはゾロにそう返した。

数十分後、俺達はクリーク達を倒した。

そして、俺達はバラティエを出港する所だった。

「行こう」

「…いいのか?あいさつ」

「いいんだ」

「おいサンジ、カゼひくなよ」

「オーナーゼフ!!!……長い間!!!くそ世話になりました!!!この御恩は一生…!!忘れません!!!」

「くそつたれがア!!!さみしいぞ畜生オオ!!!」

「ぎびじいぞ——っ!!!」

パティとカルネが号泣しながらそう言った。

「また逢おうぜ!!!クソ野郎ども!!!」

サンジは泣きながらそう言うと、船に乗り込んだ。

「いくぞ!!! 出港!!!」

こうして俺達はバラティエを出港した。

5. 5話 ココヤシ村

バラティエを出港した俺達は、ナミの要望でココヤシ村に来ていた。

「海賊がここに何をしに来た」

ゲンさんがそう言ってきた。

「ゲンさん、お久しぶりです」

おれは、ゲンさんにそう言った。

「ゲンさん久しぶり！」

ナミがそう言った。

「ナミにカイト君か。すまなかつたな」

「大丈夫ですよ。海賊船が来たら誰でもそんな反応になりますよ」

「そうか、ありがとう。それで、その四人は君の仲間か？」

「そうです。ちなみに船長は俺じゃなくて、この麦わら帽子をかぶっている俺の義弟です」

「おれは、ルフィ。海賊王になる男だ！」

「そうか。ナミとカイト君の仲間なら大歓迎だ。ゆっくりしていつてくれ」

こうして俺達はココヤシ村に上陸した。

おれはナミと一緒にベルメールさんとノジコの家に向かった。

ちなみに二日程滞在することになった。

ルフィ、サンジ、ウソップは村を見て回ると言っていた。

ゾロはというと、ドクターに治療してもらっている。

そんなこんなでベルメールさんとノジコの家に着いた。

「ベルメールさん、ノジコただいまー」

ナミはそう言ってミカン畑にいた二人に抱き着いた。

『ナミ！おかえりなさい。カイト（君）も』

ベルメールさんとノジコが俺とナミに向かってそう言った。

「ただいま、二人とも」

そして、俺とナミはベルメールさんとノジコの家に泊まることにした。

俺たちがココヤシ村にきて二日が経った。

やってしまった…

ベルメールさんとノジコと一線を超えてしまった…

あんな美人二人に迫られたら仕方ないよね。

俺は今、ゲンさんに呼ばれて駐在所に来ていた。

「実はな、君に渡したい物があるんだ」

ゲンさんはそう言って一本の刀を差しだしてきた。

おい、ちよつとまでこの刀って、B L O A C Hの鏡花水月じゃねエか。

なんでこの世界にこの刀があるんだ？

いや流石に似てるだけだよな。

「この刀は鏡花水月というらしい」

やっぱり鏡花水月かよ！

流石に能力はないよな？

「実はな、君とナミがこの村を出て二日程して謎の漂流者がいてな、助けてくれたお礼と言ってこの刀をくれたんだ。この刀には特殊な能力があるらしいんだが、私には使えなくてな。君なら使えるんじゃないかと思ってな」

能力あるんかい！

ってことは完全催眠使えるかもしれんのか。

さすがにチートすぎんだろ！

「ありがとうございます」

俺はそう言って刀を受け取った。

数分後、俺たちはココヤシ村を出港した。
ちなみにナミの左肩にはミカンと風車のタトゥーが彫られていた。

6話 ローグタウン

俺達は今、^{グランドドライン}「偉大なる航路」を目指し船を進めていた。

ナミがビーチチェアに座って新聞を読んでいると二枚の紙が落ちてきた。

それを見ると、ルフィと俺の手配書だった。

「あああああ——っ！」

「なっはっはっは!!おれ達は『お尋ね者』になったぞ!!二人共3千万ベリーだつてよ!!」

「おい、ルフィあんまりはしやぐな。手配書が出たつてことは海軍が本格的に海軍が俺たちを敵と判断したつてことだ」

なんで俺まで手配されてんだ？

多分あれか。ココヤシ村に滞在してた十年間、修業がてら島を出て海賊狩りまくつてたから。

「それに、この金額ならきつと『本部』も動くし、強い賞金稼ぎにも狙われるし……これは^{イーストブルー}『東の海』でのんびりやつてる場合じゃないわね」

「張り切つて『偉大なる航路』行くぞっ!!ヤローどもっ!!」

「うお——っ!!」

「おい、なんか島が見えるぞ?」

「見えたか……。あの島が見えたってことはいいよ、^{グランドライオン}偉大なる航路”に近づいてきたってこと。あそこには有名な町があるの。『ローグタウン』。別名、”始まりと終わりの町”、かつての海賊王 G・ロジャーが生まれ…そして、処刑された町」

「海賊王が死んだ町……!!」

「行く?」

く数時間後く

おれはナミと一緒に買い物を買って済ませ、死刑台広場でゾロ、ウソップ、サンジと合流した。

「——で? あいつは?」

「死刑台を見るって…言ってたわよね…」

「死刑台のある広場ってここじゃねエのか?」

そして、俺達は死刑台の方を見るとルフィが殺されそうになっていた。

ナミとウソップは、荷物を持って船に向かった。

「その死刑待て!!!」

「サンジ!!!ゾロ!!!カイト!!!助けてくれエ!!!」

「来たなゾロ、カイト。だが一足遅かったな…!!!」

バギーが刀を振りかぶりながらそう言った。

「とにかくあの死刑台を壊すぞ!!!」

『わかってる（よ）』

「やっちまいなお前達っ!!!」

『やっちまいます。アルビダ姉さん!!!』

バギー海賊団の奴らがアルビダに命令されて襲い掛かってきた。

『どけ、邪魔だア!!!』

そう言うって俺達はバギー海賊団の奴らを蹴散らしていった。

「ぎやははははははは!!そこでじっくり見物しやがれっ!!!てめエらの船長はこれにて終了だア!!!」

バギーがそう言うって刀を振り下ろした。

「カイト!!ゾロ!!サンジ!!ウソツプ!!ナミ!!わりい、おれ死んだ」

ルフィはそう言うって笑った。

バリバリッ!!

ルフィが笑った直後、死刑台に雷が落ちた。

「なははは、やっぱ生きてた。もうけっ」

「広場を包围!!海賊どもを追い込め!!」

「きたっ!!逃げろオ!!」

そして、俺達は海軍から逃げた。

その後、とある男のおかげで何とか海軍から逃げのびた後、俺達はローグタウンを出港した。

「あの光を見て。 //導きの灯” あの光の先に //^{グランドドライン}偉大なる航路” の入り口がある」

「よっしゃ。偉大なる海に船を浮かべる進水式でもやろうか!!」

サンジがそう言っつて樽を持ってきた。

「おれは、オールブルーを見つけてるために」

「おれは、海賊王!!」

「おれア、大剣豪に」

「私は、世界地図を描くため!!」

「俺は、ルフィの行く末を見届けるために!!」

「お…お…おれは、勇敢なる海の戦士になるためだ!!」

「いくぞ!!!
// 偉大なる航路 //
グランドドライン
!!!!
」

偉大なる航路編

7話 リヴァース・マウンテン

「おい大変だ!!! ナミ、光が途切れた。やべエな!! “導きの灯”^ひなのにな」

ルフィがメリー号の船首にぶら下がりながらそう言った。

「灯台の灯だもん。そりゃ途切れもするわよ。そのために航海士がいるんでしょ? 大丈夫、方角くらい覚えてるから」

「偉大なる航路グランドラインの入口は、山よ!」

ナミがそう言つて偉大なる航路グランドラインの海図を机に広げた。

「山!?!」

「導きの灯が差してたのは間違いないよ」

“ 赤い土の大陸レッドライン”にあるリヴァース・マウンテン

「何だ、山にぶつかれたのか?」

「違うわよ、ここに運河があるでしょ」

「運河!? バカいえ、運河があらうと船が山を登れるわきやねエだろー!」

「それはそうだが、実際ここしか入り口ねエしな」

「そりやバギーから奪った海図だろ!? 当てになるかよ。だいたい何で“入り口”へ向かう必要があるんだ。南へ下ればどつからでも入れるんじゃないやねエのか?」

ゾロがそう言った。

「それが出来れば苦勞しねエんだがな。いいか、グランドライン偉大なる航路は“カームベルト風の帯”つていう二本の海流に挟み込まれて流れてるんだ。そして、“カームベルト風の帯”はその名の通り無風地帯になっているんだ。そして、厄介な点が一つある」

俺がそこまで言いかけると、ウソツプが窓の外を見て叫んだ。

「おい!! あれっ!? 嵐が突然止んだぞ」

「本当だ、静かだ」

「……え…そんなまさか…嵐に乗って“入り口”まで行けるハズなのに…」

ナミがそう言って不安そうな表情を浮かべた。

「やべえ!! みんな、急いで船を嵐の軌道に戻すぞ!! ルフィ、ウソツプ、サンジ、帆を畳んで来てくれ!! ゾロは舟を漕ぐの手伝ってくれ。」

俺は、ルフィ達にそう言ってゾロにオールを渡した。

「何あわててんだよ、お前。漕ぐってこれ帆船だぞ」

「何でまた、わざわざ嵐の中へ」

「いいから言うこと聞け!!」カームベルト 風の帯カームベルトに入っちゃったのよ!!」

ナミがそう言つてルフィとウソップにキレた。

「うわつ、何だ何だ地震か!？」

「違う!海王類が出てきた!!」

……ンニツ……!!ツキシ!!!

船の真下に出てきた大型の海王類がくしゃみをした途端、船が吹き飛んだ。

「ナミ!大丈夫か!？」

俺は、そう叫んで吹き飛んだナミを何とか掴み、抱き寄せた。

く数分後く

「…よかった…ただの大嵐に戻った…」

「これでわかった?入口から入る訳」

「ああ…わかった…」

しばらくすると、目の前に巨大な影が現れた。

「不思議山が見えたぞ!!!」

ルフィがそう叫んだ。

「吸い込まれるぞ!!! 舵しつかり取れ!!!」

「まかせろオ!!!」

「ウソみてエだ…本当に海が山を登ってやがる…」

「ずれてるぞもうちよつと右!!! 右!!!」

「右!!! おもかじだア、おらアア~~~~~っ!!!」

ボキイツ

「舵が…」

「ぶつかる——っ!!!」

メリー号は、舵が折れて操縦ができなくなり、アーチの柱にぶつかりそうになっていた。

「ゴムゴムの……風船つ!!!」

ルフィがそう叫んで柱と船の間に飛び込み、膨らんだ。

「ルフィ!!! ウォーターバインド!!!」

俺はそう叫び、手から縄状の水を出して、ルフィを捕獲し、船へ引つ張り込んだ。

そしてついに、山を登り切った。

「おお見えたぞ、偉大なる航路!!!」